

2002年度プロフェッショナル論文発表会

IBMの技術力の証明となるプロフェッショナル論文に、より積極的な取り組みを。

2002年11月8日(金) 日本アイ・ピー・エム箱崎事業所にて、2002年度プロフェッショナル論文発表会が開催。最優秀論文および優秀論文の執筆者によって受賞論文の発表が行われました。

プロフェッショナル論文は、日本アイ・ピー・エムが毎年社内で公募している技術論文であり、1960年に「DPセミナー論文」としてスタートして以来、日本アイ・ピー・エムのエンジニアの成果の発表の「場」となっています。準入選以上の優れた論文については論文データベースに集録され、社内だけでなく国内における先進システムの構築や運用に貢献してきています。なお本誌掲載の各論文も、プロフェッショナル論文の中から特集テーマに合わせて特に選ばれたものです。

より多くのパテントの取得と論文の発表を期待

会場となった会議ホールでは、オープニングに続いて日本アイ・ピー・エム 専務取締役 富永 章のスピーチがあり、今後ともIBMが高い競争力を維持していくためにも積極的に論文の執筆・公開に取り組んでくださいと、社員により一層の奮起を促しました。



富永 章

「企業の技術力を計る基準の一つに、パテントの取得数があります。ワールドワイドのIBMが所有するパテント数はアクティブなもので約1万8,000件。そのうち日本アイ・ピー・エムが取得したものが約4,000件です。技術水準を今まで以上に上げて、競争力をさらに高めるためにはパテントの取得に積極的に取り組んでほしいと考えています。それと同時に、論文発表によるテクノロジーのディスクロージャーも不可欠です。それも学会で受け入れられる高水準な内容でなくてはなりません。パテントの取得と論文の発表によって技術水準を高めることが、高い競争力につながり、ひいてはお客様満足度の向上につながるのです。

また、論文については、世界中の技術者から参照されてこそ価値があります。内容そのものが世界に通用するレベルであることはもちろん、英語で発表することを望みます。皆さんには、まずはプロフェッショナル論文にトライすることを期待します(富永)



応募総数は毎年増加、若い社員からの積極的な応募も続いて、技術理事 福場 芳正により、2002年度のプロフェッショナル論文の応募状況および審査経過の報告と、全般的な講評がありました。

まずは、副社長 丸山 力の以下の文章を引用して、論文の持つ意味を紹介し、その重要性をあらためて訴えました。

「論文とは自分がそれまでやってきた仕事を振り返り、整理し、また業界における技術の進展の中でどう位置付けになっているのか、どの部分が新しいことなのか、ということを明快に一つの体裁に則して書かれたものです。

一つの仕事を成し遂げた時に論文としてまとめることは、それまでの仕事を形にして残すということであり、また書くことによつてあらためて自分の仕事を客観的に整理して見ることができます。人々の思考はこの「整理」される事により心おきなく次の段階に進み、またそれを応用する事により新しい発想が生まれてくるものです。

一方、論文を書く力、つまり自分の技術活動の成果を、手早く簡明に理路整然と記述できる能力は、仕事の能力と同様に重要です。それは分析力を問われるとともに知的成果を手早く仲間と共有でき得る能力であり技術者や研究者の成長のための必須の能力と言えるでしょう」

論文の応募状況・審査経過については、応募総数は796編であり、1次～3次の審査を経て、最終審査に残った21編の論文から最優秀1編、優秀14編が決定したという報告がありました。応募総数は年々増加の傾向にあるだけでなく、



福場 芳正

日本アイ・ピー・エム社内からだけでなく、グループ企業の社員からの論文も増えつつあり、また、勤続年数が1～2年という若い社員からの積極的な応募も増え、おおむね好ましい方向に推移しているという分析がありました。

盛況となった特別講演と論文発表セッション

午前中のハイライトとして、つくば国際大学 産業情報学科 教授 大野 俊郎氏に「『論文作法』基礎の基礎」というテーマで、論文の書き方をご指導いただきました。大野氏の講演を目当てに詰めかけた来場者も多く、立ち見も出るほどの盛況となりました。



大野 俊郎氏

午後からは3会場に分かれ、最優秀論文および優秀論文の執筆者による論文発表が行われました。全部で14の発表が行われました。このうち、「ビルドタイム / ランタイム・アプローチによる設計プロセスの革新」で最優秀論文を受賞した日本アイ・ピー・エム インダストリアル・サービス事業部 技術理事/ICP-ITA 長谷川 一彦、日本アイピーエム中部ソリューション 主任ITスペシャリスト 浅羽 和弘と、優秀論文を受賞し、本号掲載論文でもある「データベース・サーバーにおける連続稼働実現への考察」の著者、日本アイ・ピー・エム システムズ・エンジニアリング 第二システム・センター ハイアペイラビリティ・システム部 ICP-ITスペシャリスト 房 律子に、論文への思いを語ってもらいました。

論文の題材は、日ごろの取り組みから発想

最優秀論文を受賞した「ビルドタイム / ランタイム・アプローチによる設計プロセスの革新」は、製造業における製品設計にITシステム開発手法(ADSG)を導入した経緯を論述したものです。このメソッドを採用することで、劇的な開発期間短縮の達成を狙っています。



長谷川 一彦

著者の1人である長谷川は「製品設計にIT分野のメソッドを転用したという点が評価されたのだと思います。」

私が章の組み立てと序文・結論をまとめ、それを浅羽さんが肉付けしていただきました。2人で一気に取り組んだこともあって、意外に早く書き上げることができました」

プロフェッショナル論文への応募は今回が初めてという浅羽は「論文の執筆は、アイデアときっかけさえあればそんなに大変なこと



浅羽 和弘

ではないと思います。普段は日常業務の処理で頭がいっぱいですから、自分が当たり前だと思っていることがそのまま論文のアイデアになるということに考えがおよびません。ですから、普段からほかの専門分野の人たちと、積極的にコミュニケーションの機会を持つことが大切ではないかと思えます。『そんなに面白いことをやっているのか』と驚かれることで触発されることもありますから。今回の論文については、長谷川さんの勧めもありましたし、論文にまとめるべきプロジェクトという認識が2人にありましたが、執筆は一気に進みましたね」と振り返ります。

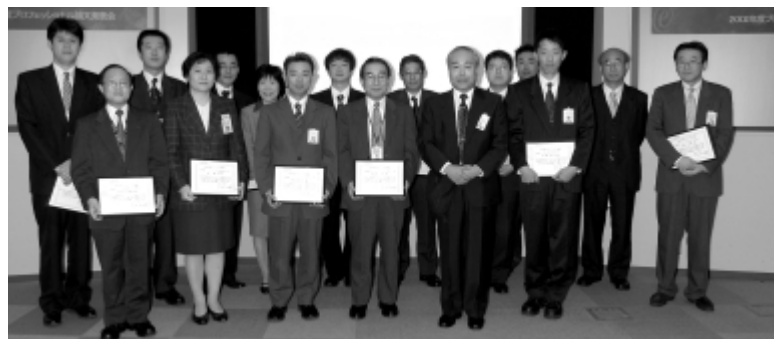
日常業務からテーマを拾い出し、去年の経験をバネにデータベースの連続稼働の実現について、システム面と運用面の両面から論述したのが房 律子の「データベース・サーバーにおける連続稼働実現への考察」です。



房 律子

「今回、データベースの高可用性について取り上げたのは、日々の業務を通じて、この分野は今後ますます重要になるという感触があったからです」と、房は語ります。

「プロフェッショナル論文の応募は4回目です。いずれもデータベース周りのトピックを取り上げました。実は昨年は、連続稼働のテーマで経験事例報告に応募したのですが、あまり評価していただけませんでした。高可用性について書こうとすると、どうしても範囲が広がり、テーマを深く掘り下げることができなかったからです。そこで今回の論文では話が拡散しないように心掛けました。優秀論文を受賞できたのも、去年の経験を生かすことができたからではないかと思っています」



受賞者集合